

混沌とした中から

プリンタについて(その2)

プリンタの話をしよと思ったらタイプライタの話になってしまいました。確かにプリンタの前に使っていたのがタイプライタですから話がずれたわけではないのですが、プリンタとっておいてタイプライタではイメージが違ったかもしれません。しかし、コンピュータでの印字の初めは文字(キャラクタ)だけでした。プログラムはもちろんキャラクタだけですし、分布図なんかもキャラクタだけで打ったものです。初めて触ったプリンタはCASIOの「タイピュータ」と呼ばれるもので、コンピュータに接続して使用する入出力機器で、大きなキーボードにインクジェットのプリンタがついてものです。このタイピュータは小さなテーブルにキーボードとプリンタを組み込んだようなもので、サイドにはテープパンチャーとテープリーダーが付いていました。テープパンチャーは紙テープに穴を開けるもので、もちろんリーダーはそれを読み込むものです。昔のパソコン雑誌のところでも書きましたが、その頃は今のようない記憶媒体が無いので幅3センチぐらいの紙テープに穴を開けたものでプログラムの入力、データの出力なんかをやっていました。最初に仕事でプログラムを作った頃はまだ紙テープでした。懐かしい紙テープの話をするとうるさくなるのでこの辺で。このタイピュータはインクジェットでしたが、今のインクジェットとは異なり本体にインクのタンクがあり、細いパイプでヘッドまでいって、途中でポンプがあり先端のノズルからインクが飛び出すようになっています。ノズルは今のようによくあるわけではなくたった1個で、飛び出したインクを高圧の偏向板で曲げてロール紙に印刷するようになっています。割と静かなもので(比較対照が紙テープパンチャーですから当たり前ですが)左右にヘッドが動いて印刷していたように覚えています。家庭用のインクジェットが出た頃もそうでしたがこの頃のインクジェットもきちんと使っていないとよくノズルが詰まったりしました。しかし、大学の頃は他に作ったプログラムを印刷するものが無いわけですから重宝したものです。

さて、次に登場するのが懐かしいパソコン雑誌にあった宣伝のプリンタです。初めての家庭用プリンタですが、ドットインパクトプリンタです。ドットインパクトプリンタにはインクリボンがあります。前回書いたタイプライタもインクはインクリボンにしみこませてありました。あまりインクリボンの説明をしてなかったのですが、布製のリボンにインクをしみこませたものがインクリボンで、タイプライタの頃から上下2段で赤黒のものもありました。そういえば書くのを忘れたのですが、私はタイピュータでインクジェットのものでしたが、それらはテレタイプと呼ばれ一般にはタイプライタと同じ文字の刻印したハンマでインクリボンを使って印刷するものが一般的でした。テレタイプはそれまでは通信回線でデータをやり取りするもので、よく古い映画の新聞社や通信社で送ってきたニュースを紙テープやプリンタで打ち出すシーンが出てきます。初めは手で打つだけであったものが電動で動くようになっていました。さてドットインパクトプリンタですが、初期のプリンタには縦に8個のハンマが並んでいました。このハンマは棒状のものが出たり入ったりする構造で信号を送ることによって1列8本のハンマが飛び出しインクリボン越しに紙にぶつかって印刷するようになっています。ハンマで印刷できるのは点ですから叩いて印刷するのでドットインパクトプリンタと呼びます。叩いて印刷するわけですから想像できると思いますが非常にうるさいプリンタでした。初期の家庭用はエプソンなどですが雑誌の宣伝のものは134,000します。(次回へ続く)

(今週の情報誌から)

○日経エレクトロニクス 9月11日号

解説 「超低価格」が世界を制す

→次のターゲットは発展途上国。発展途上国の教育向けに提供を検討されている「100ドルパソコン」を筆頭にIntel名とがいろいろな開発販売プロジェクトが打ち出されている。また、携帯は1チップ化することにより20ドル携帯電話が検討されている。

○日経パソコン 9月11日号

特集 Vistaを支えるテクノロジー

→2007年登場する次期Windows、Vista。半透明なウィンドウなど派手な特徴も多いが14の中核技術が採用される。そのユーザーメリットは。